

1. 里地里山の歴史的変遷

里地里山は、長い歴史の中での多様な人間の働きかけを通じて、特有の自然環境・知恵や技術、自然と共生した生活文化を形成する場として機能してきた。

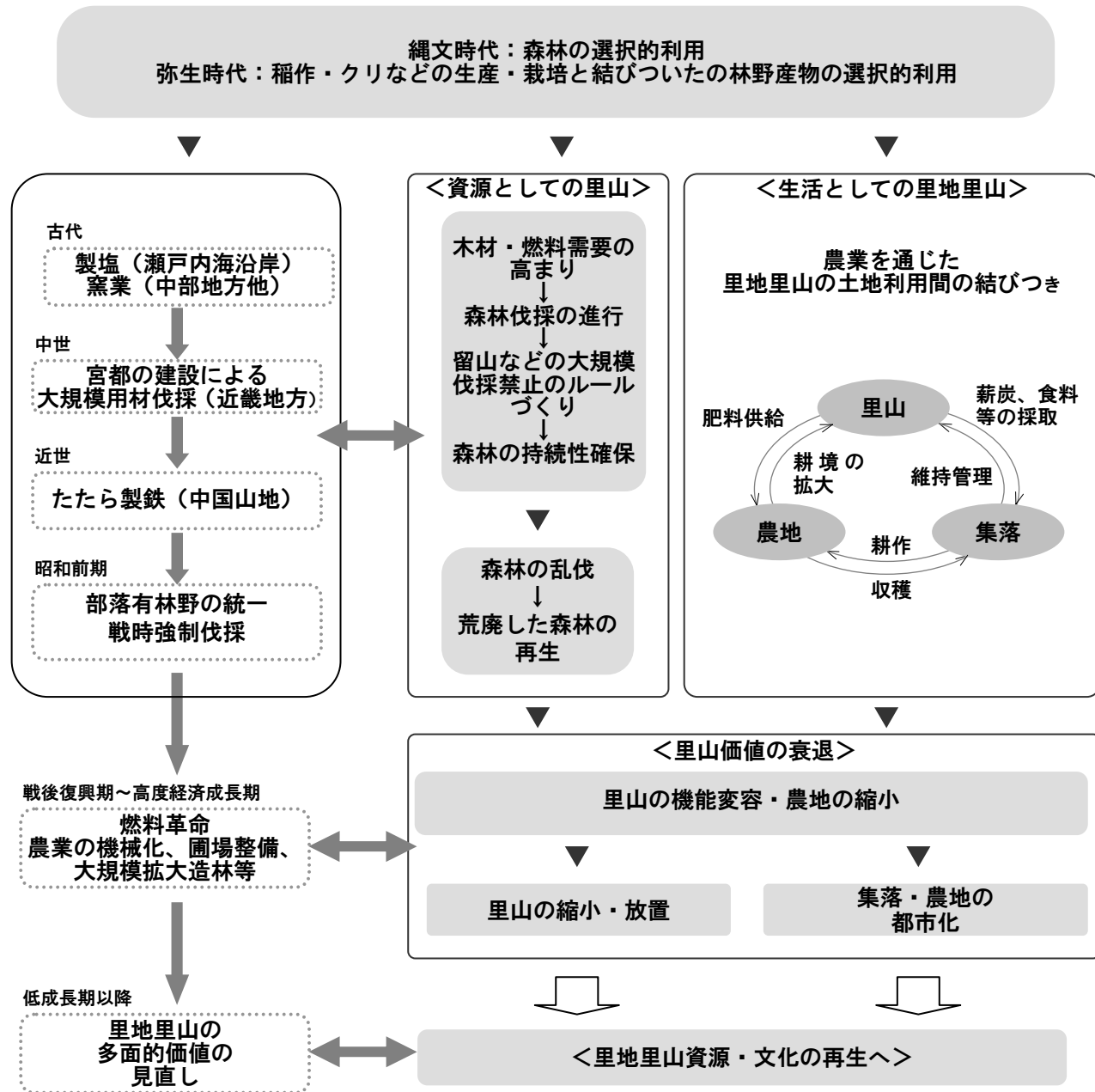


図 1：里地里山の歴史的変遷の概念

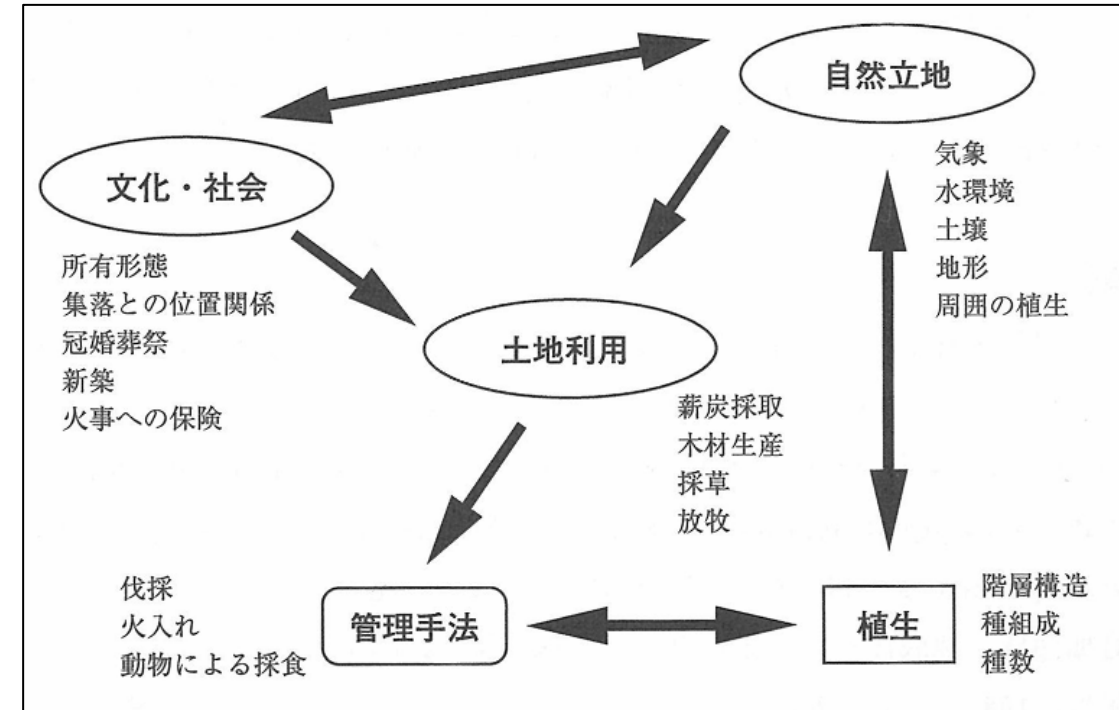


図 2：里山の相互利用と関係性

出典：「生態学からみた里やまの自然と保護」

時代区分	土地利用の変化				
現代	平成	都市の拡大の沈静化	集落構成員の高齢化	造林地の整備・育成	里山放置の進行 森林材の選択的利用
	昭和	都市の拡大	集落・農地の縮小	大規模拡大造林	山野の農用利用 森林材の選択的利用
近代	大正	都市の拡大	集落・農地 新田の開発	建築用材の植林	山野の農用利用 森林材の選択的利用
	明治	都市の拡大	集落・農地 新田の開発	建築用材の植林	山野の農用利用 森林材の選択的利用
近世	江戸時代	都市の拡大	集落・農地 新田の開発	建築用材の伐採 材の植林	山野の農用利用 森林材の選択的利用
中世	戦国～鎌倉時代	都市の分散化	集落・農地 荘園の発達	建築用材の伐採 山野の農用利用	森林材の選択的利用
古代	奈良～平安時代	都市の成立	集落・農地 荘園の発達	建造物・産業 利用のための 伐採	森林材の選択的利用
	古墳時代	集落の成立	古墳造成による 大規模伐採		森林材の選択的利用
原始	弥生時代	稲作			森林材選択的利用 貯蔵穴・クリの栽培など
	縄文時代				森林材の選択的利用
	旧石器時代				森林材の選択的利用
	太古				森林材の選択的利用

図 3：里地里山の土地利用の変遷模式図（イメージ）

ミズナラ林地域

事例：焼畑による循環型農林業（山形県鶴岡市）

○持続可能な土地の循環利用

水はけのよい杉伐採地は温海かぶ栽培に適していることから、下草を刈り払いして焼畑した斜面にカブの種をまき、除草と間引きをして、雪の降る頃までには収穫を終える。カブを収穫後の畑には春になるとワラビなどの山菜が芽吹き、これを収穫した後に苗木を植え、再び森林を育成・管理している。このように焼畑は、長年山林に蓄積された枯葉や枝などに火を入れる事により植物が必要とする窒素含量が数倍に増加するなどの効果があり、植林・伐採・焼畑・赤カブ栽培・植林という一連の伝統的な取組みが継承されている。



通常造林と温海かぶ後造林の収支を比較すると、通常造林よりも温海かぶ後造林の方が収益性が高く、また焼畑によって林木の生長は促進される。このように、土地の循環利用によって、赤かぶの生産、育林ともに資源循環型の土地利用が可能となっている。

アカマツ林地域

事例：菊炭の生産（兵庫県北摂地域）

○炭焼きによる資源の持続的利用

江戸末期より植林されたクスギを地上から1~2mの高さで伐採し萌芽再生を繰り返すことで、菊炭の原木を持続的に入手してきた。



○多様な生物の生息・生育環境の保全と伝統的な里山景観の継承

定期的なクスギ林の手入れにより、林床に適度な照度が確保されるとともに、萌芽を繰り返し株元が太くなった「台場クスギ」が形成され、その結果としてクスギ林は夏緑植物やカブトムシ、オオクワガタなど多様な生物の生息・生育地となっている。また、古くから現在まで続く輪伐による里山林の維持管理は、林齢の異なる樹林地がパッチ状に広がるモザイク景観を呈しており、伝統的な里山景観が現代に継承されている。

シイ・カシ萌芽林地域

事例：備長炭生産（和歌山県みなべ町）

○持続可能な炭焼き技術の継承

江戸時代には、炭焼き人達は、山のウバメガシが少なくなってくる、また別の山へ移り、古い窯を修復して炭を焼いていた。山を熟知し、自然環境を読む優れた炭焼きの技術は現在も継承されている。



○備長炭原木林の育成

目的樹種の純林の育成、生産目標に合った原木確保、林地保全を目的とした、択伐と皆伐を組み合わせた独自の施業による原木林の育成が古くから行われており、現在も備長炭の原木林が多く保全されている。

○備長炭の多目的利用

主に調理用として使われてきた備長炭だが、現在、脱臭剤、湿気を調整する建築資材、また食品添加物や繊維加工の分野など様々な面で製品が開発されており、伝統産業の継承につながっている。

事例：草地管理（熊本県阿蘇地方）

○慣習に基づく持続的な維持管理
草地管理に関する伝統的な慣習としての、野焼きと輪地切りが現在も継承されている。



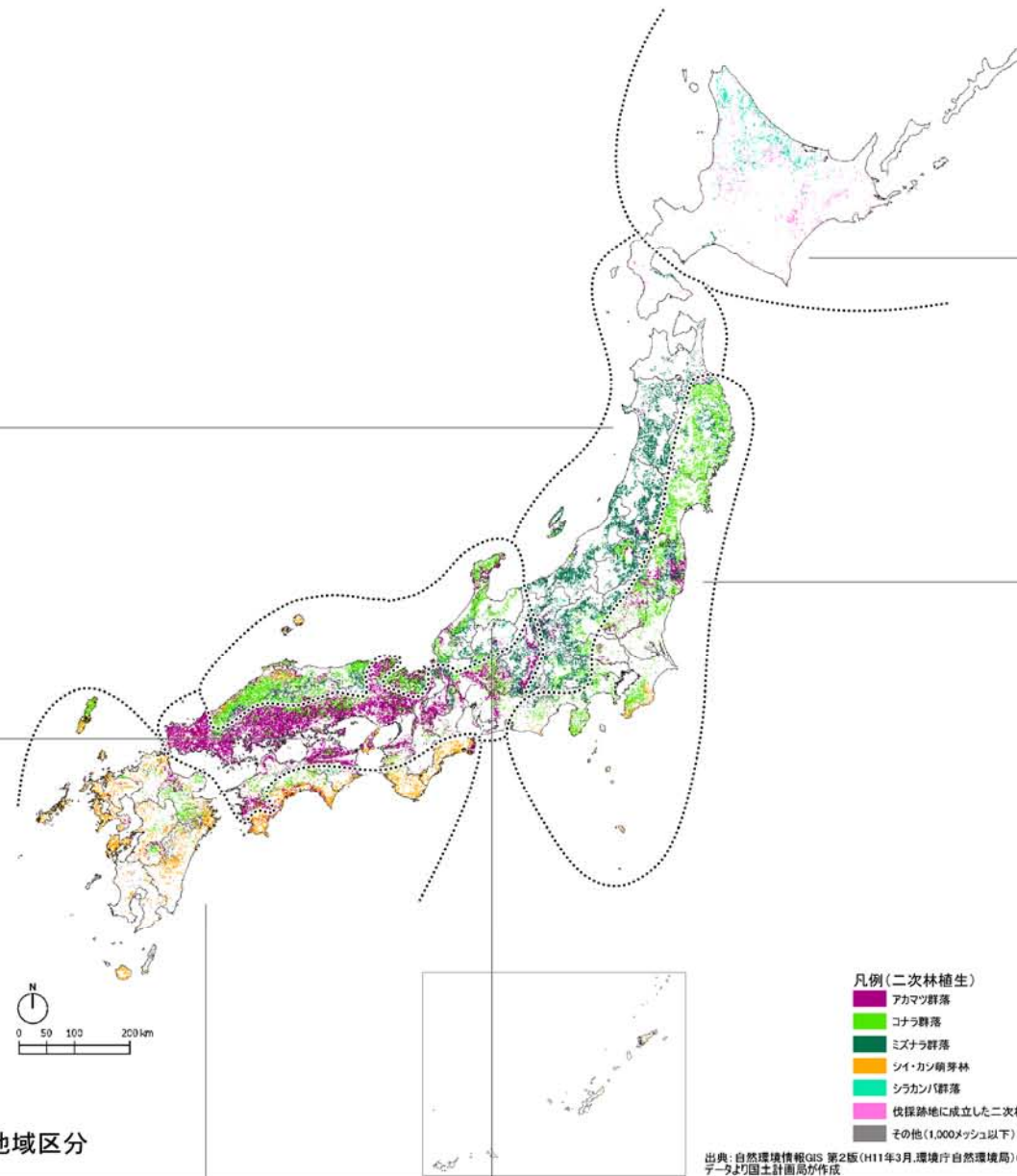
○地形に応じた土地利用によるモザイク型草地環境の継承

地形に応じて農業や畜産業が開発され、その結果として湿地性植物群落、二次草地、改良草地によるモザイク型の草地環境が継承されている。

○希少種の生息・生育環境の保全

定期的な刈り取りや火入れ、放牧などの利活用により貧栄養状態が維持されたことが、草地の遷移や外来帰化草本の侵入を抑制し、その結果として草原性の動植物や希少種の生息・生育環境が保全されている。

2. 里地里山の類型別にみた伝統的な保全・活用手法の特徴



シラカンバ林地域

事例：アイヌ文化を基底とした土地利用（北海道平取町）

○自然と共生する思想の継承

「自然の恵みによって生かされている」というアイヌの人々の自然観は民族文化の基本として捉えられ、現在も世代を超えて継承されている。



○里山利用の伝統

集落周辺の里山は、動物の狩猟、山菜、キノコ類、クリなどの採取の場、大正期以降は牛・馬の林間放牧の場としての利用がなされていた。また、オニョウニレからは繊維を取って衣服に利用されていた。こうした伝統は変遷しながらも現在に継承されている。

○地形と順応した独自の土地利用

近代以降の開拓にあたって、資源利用の思想は牛を直射日光から守るために放牧地の中にミズナラなどの被陰樹を点在させる独特の土地利用につながり、そのことによってスズラン原生地などが形成されてきた。

コナラ林（東日本）地域

事例：モザイク的土地利用（埼玉県所沢市三富新田）

○モザイク的土地利用

屋敷地、農地、平地林から成る短冊状の地割が一つのまとまった単位として機能するとともに、これらの地割が整然と連続することにより、広範囲にわたってモザイク的な土地利用が展開している。



○平地林の落ち葉を活用した循環型農業

平地林の落ち葉を断熱材に用いた苗床で苗を作り、落ち葉を主材料とした堆肥を圃場に多量に撒布するなど、循環型の畑作が現在に継承されている。

○用途に応じた樹木の植栽・育成

防風の役割を果たすとともに、生活用具や建築用材としても活用できるよう、竹や、ケヤキ、スギ・ヒノキなどの樹木が植栽されており、用途に応じた樹木の植栽・育成が継承されている。

コナラ林（西日本）地域

事例：森の保全と水循環（滋賀県高島市）

○生業や慣習による里山の保全
湖西地域の里山はかつては炭焼きや木地師などの生業に支えられ、現在も氏子組織や財産区により管理され健全に維持されている。水循環や水質浄化作用などの働きを通じて、琵琶湖沿岸域の環境を支えている。



○比良山系を水源とした湧水の複合的利用

「かばた」は比良山系を水源とした湧水と水路を組み合わせたシステムであり、元池、坪池、端池の3つに分けられ個々に異なる用途に供するなど、現在も複合的な利用が継承されている。

○水を育む森に対する地域組織の継承

水源地の里山である共有林を保全するため、明治20年代には山林保護規約が設けられた。このような里山保護の仕組みが現在の豊かな水の確保につながっており、水を通した山から琵琶湖へのつながりを大切に環境意識が継承されている。

事例：伝統的林業の営み（鳥取県智頭町）

○長い歴史を持つ持続的な林業の営み

「大径木生産を目標とした長伐期施業」「優良材(無節材)の生産を目標とした集約的施業」により、資源を持続的に管理し利用する森林経営が行われ、長い歴史を持つ林業の営みが継承されている。



○樹齢100年を超えるスギ林の保全による生物多様性の確保

伐採を最小限にとどめる育林によって、樹齢400年を超える「慶長杉」や江戸時代から継続的に施業されてきた「ダドコ美林」と呼ばれるスギ林など、美林という名にふさわしい森林が多く残されている。また沖ノ山一帯の1,000haを超える植林地では、林床の適度な日照による草本層の多様性の確保が、生物の多様性にも寄与している。

3. 里地里山の伝統的な利用管理手法の特質と構造

地域における自然環境の特質と、地域経済社会の発展段階に対応して、資源としての里山、生活環境としての里地里山の様態は多様ではあるが、今日においても今なお伝統的な利用管理手法が根付いている地域におけるその特質は、「資源の持続的管理・利用」「資源の多目的利用」「持続的な空間利用」「生物多様性の保全」「自然と共生した生活文化の発達」に集約される。

○資源の持続的管理・利用

北摂地域のアカマツ林では、萌芽更新による独特の薪炭林管理に関する技術が受け継がれてきた。智頭地域では、日本海型のスギ品種の特性を生かした苗木生産～保育管理を通じた長伐期林業の伝統が継承されてきた。さらに備長炭生産もウバメガシ林の特性に基づく継続的な施業が継承されている。

○資源の多目的利用

三富新田の平地林では、落葉や小枝などの資源を燃料や堆肥、生活道具、建築用材などの資源としての採取を通じて、里山林そのものが生活環境の保全などの役割を果たしてきた。

○持続的な空間利用

鶴岡の焼畑農業、阿蘇地域の二次草原では、間断的な利活用による里地里山空間の有効活用による生業や文化が継承されている。牧野林、薪炭林や採草地、農地などが自然環境に応じて配置され、適正な規模の空間利用が持続されてきた。

○生物多様性の保全

平取町のスズラン群落、智頭のスギ林、阿蘇地域の二次草原や北摂地域のアカマツ林では、定期的な人為的かかわりが里地里山の生物多様性の保全に寄与している。放牧や刈取り、間伐などの維持管理を通じて、多様な生物の生息・生育環境が保全されている。

○自然と共生した生活文化の発達

平取町では、自然と共生する思想・文化が継承され自然の恵みを与える森林を信仰の対象とした多種多様な行事・祭礼が継承されている。高島市では里山管理がきめ細かな多段階水利用に係る生活文化の継承や琵琶湖の多様性保全に大きく寄与している。

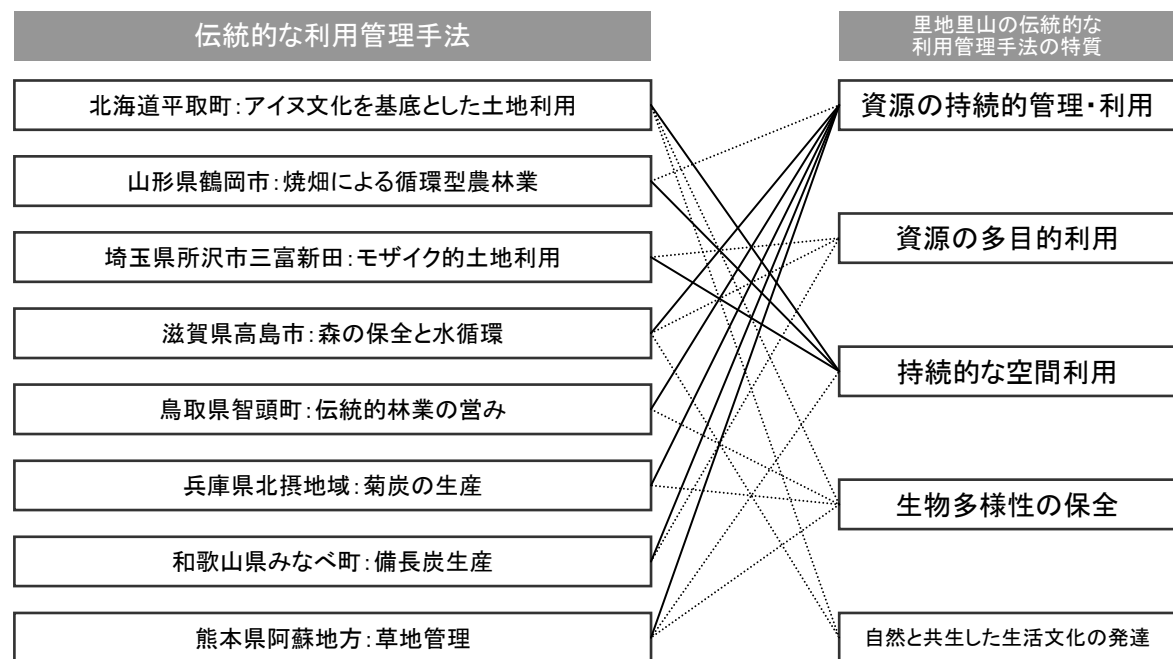


図5: 事例より抽出された里地里山の伝統的な利用管理手法の特質

- このように、自然と社会と人間が複雑に絡み合い維持されている我が国の里地里山の本質は、
- ①多様な植生・立地的要因に規定され、そこに生育する植物資源の生理的特性や土壌、気候等を生かした利用手法が存在すること
 - ②主として地域の社会構造に規定された産業・経済・文化的特性を反映した資源利用の構造が確立していること
 - ③地域社会の内的要因の独自性や、外的・制度的要因の固有性による調整関係が形成されていることにあると思われる。
- こうした里地里山に係る<技>と<知恵>と<仕組み>が一体となっている構造を維持し、新たな時代背景の中で評価・再構築していくことが求められており、そのためには、
- A. 立地条件を生かした利用手法は地域生物資源の循環型利用を基礎とした生物多様性確保に寄与すること
 - B. 地域独自の利用手法とそれを支える社会的仕組みはモザイク的で多様な安定的な土地利用構造を支えること
 - C. 地域環境に即した利用手法を社会的な仕組みで支えることは持続的な地域固有の美しい景観づくりに寄与すること
- を踏まえる必要があり、このことは、世界に発信すべきわが国固有の里地里山の価値であると思われる。

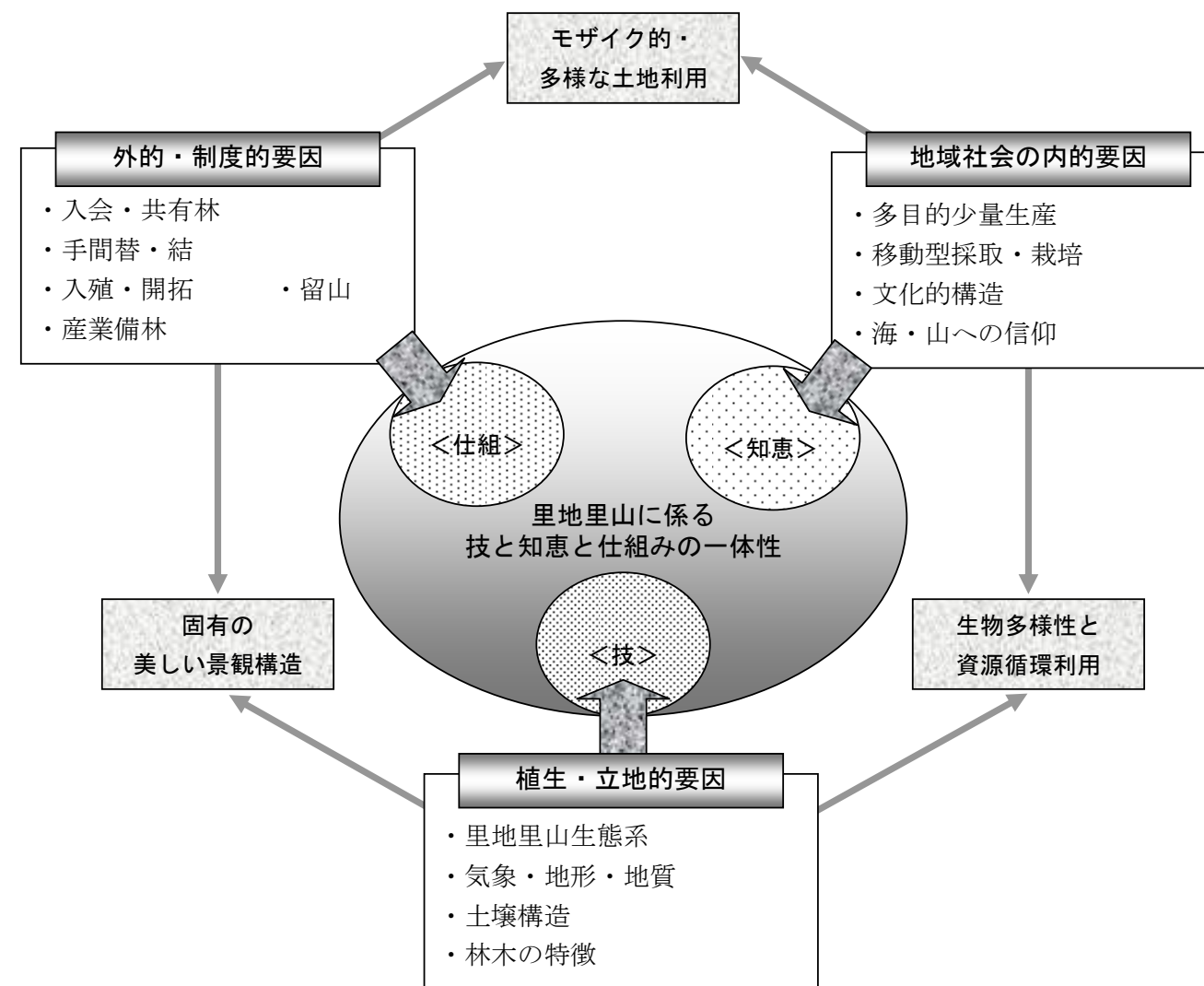


図6: 伝統的な里地里山の利用管理手法の構造